

上野原市大野の農業法人「上野原ゆうきの輪」(杉本公司代表)は、新たな市の特産品をつくろうと市内の耕作放棄地を活用して南米原産の穀物キヌアの栽培に取り

組んでいる。鳥獣害を受けにくいとされるキヌアの産地化を目指して、大神田良行副代表は「栽培方法を確立して定着させたい」と意気込んでいる。

南米原産の穀物 キヌアを新たな特産に

栽培方法の確立めざす



特産にしようとキヌアの栽培に取り組む農業法人「上野原ゆうきの輪」の杉本公司代表(左)と大神田良行副代表

＝上野原市内

法人は2012年に市内の耕作放棄地を解消しようと、地域の農家らが設立。大神田副代表が県総合農業技術センターの研究員からキヌアの栽培技術について学び、今年から市内3カ所の計約2千平方メートルの農地で栽培を始めた。8月中旬に種をまき、現在は赤い実を付け収穫間近。法人は栽培方法の確立のほか、市内のNPO法人と協力してキヌアを活用した料理や商品の開発も目指している。

農業法人と県総合農業技術センターによると、キヌアは南米地方原産の穀物で、ミネラルやカリウム、カルシウムを含み栄養バランスに優れた食材。実だけでなく、若葉を野菜として食べることもできるといふ。国内では産地化しているところはなく、年間輸入量は200ト程度。県内では上野原市のほか、韮崎市で栽培されている。

今年が発芽して成長したのは全体の半分の1千平方メートルにとまっている。大神田副代

表は「試行錯誤を繰り返して市内に適した育て方を確立し、耕作放棄地の解消と特産化につなげたい」と話している。

富士河口湖町も特産品創出へ 桃6品種を試験栽培



苗木を植樹する波辺凱保町長(左)ら

富士河口湖町は7日、地域の新たな特産物にしようと、桃の試験栽培を始めた。本郷湖周辺に自生している寒さに強い富士野生桃を台木にして育てた苗木を植え、2〜3年後の収穫を目指す。成功すればほかから販売した桃を「富士光客向け」を売行っている。

この日は、県富士・東部農務事務所や町の職員など約30人が八木崎公園近くにある800平方メートルの畑に高さ1.5メートルの「白鳳」や「なつづき」など6品種、日本の苗木を植樹した。風で倒れないように支柱を立てて、乾燥防止

9日には東京農業大のキヌア栽培ワークショップの一環で、法人が育てたキヌアの収穫や脱穀が行われる。



三井 将也、市川和貴 (富士吉田)
雨宮 文貴 (大月上野原)
宮川 彩乃 (郡留)
手塚美菜子
富士吉田支社
(0555)24-1000
FAX 23-6997
郡留 支局
(0554)45-8880
FAX 45-8880
大月上野原支局
(0554)22-0477
FAX 23-2324

用した。本栖湖から見た雪